遊戯としての劇

長尾　豐

一

ある人は劇が遊戯であり、幼兒の劇演出があそびであるといふことを肯んじようとしない。そして言ふ。

「遊戯は練習なんといふものはない。劇には練習を要する或物がある。そこが違ふ。」

なるほど、此の言葉は今日までの幼兒演出、學校幼稚園演出を見れば頷けないこともないが、併し、劇は遊戯であり、幼兒の劇演出はあそびなのである。

活動的な、そして表現的な兒童の演技はもと喜びから生まれる。頼まれて言葉を覺えたり、教へられて手足を動かす所に、喜びから生れた演技はあり得ない。從つてある日限にこれだけの事を仕上げて、それを人の前で見せようとするやうな發表本位、實演第一、看者尊重の兒童劇は、少なくもこゝにいふ兒童演出の中にははいらない。

幼い兒童はお話を聞くことを好む。聞いたお話はいろ〳〵な形を取つてその生活の中に現はれて來る。話の中の人物の對話を、甲乙ふたりでと言ふよりは、一人が言へばすぐ誰かゞ後をつけるやうに受答をしてゐることなどは、先づ當り前であらう。聞いたお話を立つて働いて見るお話ごつこお話あそびは先づその延長され、ある形を取つたものとも考へられる。

かうして遊ばれたお話あそびが、それ一度だけ

で濟むといふ事も先づ餘りない。子供は同じことをしば〳〵繰返して樂しむ。そして演ずれば演ずるほど其所に興味も湧き、自からなる工夫も生じて來るやうに見受けられる。あるひは人をかへ、組をかへて、互ひに演者となり、看者となつて、一しよになつて遊ぶ所に、固定的な演者といふものも出來なければ、他に看者といふものを必要としないことになる。ひとつ事を繰返してゐるやうではあるけれども、注意して見て居れば、其所に進歩發達の迹が窺はれる。卽興的な工夫が洗練されて、大人の思ひも及ばないやうな兒童の藝術の域にまで至る。兒童の了解を得て、さういうものを或時、人に示すことは妨げないであらう。

二

思へば今日までの多くの兒童劇は、順序が顚倒してゐたやうにも考へられる。先づ、發表の日が何月何日ときまつてゐて、それから材料を百方搜索して、それからやらせる人をきめて、練習又練習、やつさもつさの後に曲りなりにも、出來ても出來なくても其の日の間に合はせるのである。そしてその演出にあづからぬ子供達は、范然として見てゐるか、時により所によつては、その演ぜられる場所以外で遊んでゐる。

思へば何から何まで逆であり、間違つてゐたやうにも考へられる。職業演劇の興行でさへ、狂言の都合、俳優の都合では、初日を遲らせなければならぬ事も多い。ところが學校演出と言はうより今までのいはゆる學校劇には、そんな猶豫も假借もない。何があつても先づ定められた日は動かない。みんなが只それに向つて喘ぎ、それに向つて一樣に引摺られてゆくといつた形である。

そして大騷ぎをやつた後で、まるで狐が落ちたやうにキョトンとしてゐるのが、今までの學校劇などのやり方であつたらしい。けれども仕合はせ

なことには、此頃になつて平生からの劇あそびが行はれ、演者の喜びなしにそれを人前に出すやうなことはやうやく控えられて來たやうである。

奇妙なことにはさうなると演ずべき材料も、從つてまた精選されなければならぬやうに成つて來た。机上の兒童劇、生硬な教材・話材の劇化、いはゆる實演向きの脚本、感傷的な哀話劇などは、どうもかういふ遊戯としての演出には適して居ないことが實證せられつゝある。

三

劇演出の場合に、人は常に全體の一部となつて働き、又そのためには絶えず自分一箇ばかりでなく、始終相手のことゝ他人のことを考へるやうになる。こゝに協同精神の涵養される所が存すると言はれるが、そんなことは遊戯として考へても、格別珍らしい事でも又新らしい事でもないことだと思ふ。遊戯は自由なもので、同時に調和的なものである。遊戯者がその遊戯の規則を守らぬ時に、遊戯は破壞される。劇が遊戯として考へられなければ、個性尊重の自由な伸長とはならうが、調和の空氣の中に人格が統製されるものとは、おそらく成り憎いであらう。するとほんとうの意味の遊戯でもなくなれば、又劇でもなくなることになる。

兒童は又、遊戯の中にその生活を美として表現するとも言はれてゐる。生活の美しき表現としての遊戯といふことは、いはゆる學習の遊戯化、遊戯の學習化といふやうなものには、ちよつとどうも發見されがたいやうにも思はれる。

此の美といふものが舞臺や背景の美、服飾の華美でもなく、又むやみに唱歌や遊戯やダンスがあることでもないとすると、いきほひその外の所に來めなければならない。劇をたゞ雜誌脚本などゝ考へず、職業演劇の舞臺からの模擬とも思はず、引幕や背景や、衣裳や、歌やをどりや、その他一

切の附屬添加物でないと認得すれば、そして兒童周知の、親しみあり、理解ある演技、鑑賞を通しての表現が可能であるところの、十分藝術的な材料による、安易にして美しき演出であると見究めれば、此の美といふものも實は外形虛飾でなくして、もつと內なるものであり、內からのものであり、同時に偏狹淺膚なものでなくして、もつと廣い、深いものであることに想ひ到らう。

おことわり

三月號三一頁下段二—五行

「職業演劇は少しも樂しむべきものではないが、その模擬は明らかに樂しむべき事であり、同樣に俳優その他劇場關係者は少しも樂しむべきものではないが、その模擬は明らかに樂しむべき事である。」

文中、四箇の「樂」の字は「卑」の誤植につき訂正致します。

○小波お伽全集の發行

小波先生といへば今更の言を要しない日本お伽界の大家、小さい子供までが小波先生、小波をぢさんと親しい。この廣四十年間のおびたゞしい作品、日本昔噺二十四編、日本お伽噺二十四編、世界お伽噺百編、世界文庫五十編、小波お伽百話、同新お伽百話同新お伽百話等を整理し、更に新作をも加へられて十二卷の全集體として自費出版の壯擧を計畫せられた。來六月第一卷の發行以後毎月一冊宛の配本、豫約會員にのみ頒たれる。詳細は左記に照會すればよい。

（東京高輪南町五三千里閣出版部內小波お伽全集刊行會）

○お話あそびと小さい劇（長尾豐著）

さきに著者は『幼稚園ばなし』『短い對話と小さい劇』などを書かれた。子供の文學世界を創り出さうとしてゐられる。前半のお話あそびは幼兒に話をせがまれる位置にある者にとつて敎へられる事が多い。後半には赤づきんさん以下十七編の小さい劇、低學年に適當な材料が編まれてある。（原生閣書店、一圓六〇錢）